

令和7年度 近畿税理士会会長賞

私達が担うべきもの

王寺町立王寺南義務教育学校 9年 木村 珀陽

私の税に対するイメージが変わったのは、父が脳卒中で倒れ、半身不随の障がい者になってからだ。

小学生の頃税について勉強して、学校や道路の費用、医療費、ごみ処理や下水処理の費用に使用されていることを知った。けれど、身近に税金が使用されていることを理解しても、学校がある、病院で治療が受けられる、蛇口を捻れば水が出る、という社会が自分には普通にしか感じられなくて、税が還元されている実感がわかなかった。

私の中で、税金の印象といえば、消費税や所得税などで国民が払うイメージが強かった。しかし、父が車椅子生活になったことをきっかけに、福祉、医療について詳しく知った。その中で、国は税金を原資とし、障がい年金などの制度を作ったり、地方公務員のケースワーカーや介護福祉士などの給与を税金で支払ったり、福祉車両の購入費や改造費に税金を使用したり、自治体でも福祉車両の費用に補助金などを出す制度があることを知った。父の通院などをしてくださっている福祉施設の職員や、家族の暮らしを支えてくれている障がい年金などがすべて税金によって成り立っていることがわかった途端に、税金の意義やありがたみ、税金が国民にしっかり還元されていることがよく理解、実感できた。

昨今、消費税の減税や廃止を求める声が高まりつつある中で、大幅な消費税の減税や廃止はかえって、国を貧しくさせたり、世の中を混乱させると個人的に思う。

現代に生きる私達、特に高齢者や体が不自由な人は税に助けられている風を感じる。道路、警察署、病院、学校、水など私達が生きる上で、必要不可欠なものばかりのはずだ。しかし、多くの人はこれらがあるのを当たり前だと感じてしまい、税の大切さや税への関心が低下して、税についてしっかり考えるということがなくなってしまう。

消費税の「十八歳意識調査」でわからないと答えた人が17%近くいることがそれを物語っているように思う。

今、大切なのは社会に生きるすべての人がどのように税が還元されているかを知り、税の意義などをしっかり考えたうえで、自分の意見を持ち、積極的に社会・税制に関わっていくことが大切だと思う。私達にとって、税金は「払うべきもの」でもあるが、同時に「人と人をつなぎ、誰かを助けるもの」でもある。

私と私の家族の生活は誰かが納めてくれた税金によって助けられている。ならば、次の未来・社会を私達の世代が受け継ぎ、次の世代のために、税金をしっかり納めて、税と向き合うことが、助けられた私達のすべきことだと強く思う。